2020 年 10 月 11 日　司祭　越山　哲也
八戸聖ルカ教会

聖霊降臨後第 19 主日（特定 23）　説教

「婚礼の礼服～日々、小さな恵みに感謝～」

〔旧約聖書〕ｲｻﾞﾔ書 25:1~9
〔使 徒 書〕ﾌｨﾘﾋﾟの信徒への手紙　4:4~13
〔福 音 書〕ﾏﾀｲによる福音書 22：1～14

主の平和が皆さんと共にありますように。

「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」（マタイによる福音書２２：１４）

本日の福音書では、イエスによって「婚宴のたとえ」が語られます。ある王が王子のために婚宴を催そうとし、人々を招きます。この王の人々への招きが、３回なされることになります。王のこの３回の招きに共通していることがあります。それは、王はどこまでも婚宴という喜びに人々を招こうとしていますが、招かれた人々はその招きのすばらしさに気づかず、招かれたという出来事に価値を見出しません。人々は、招きに応じようとせず、招きを無視し、招きを伝えて来た者を拒絶し、また婚宴という招かれた場に居合わせてもそこに価値を見出さずに礼服を着ません。

「婚礼の礼服」とは何を示しているのでしょうか。それは救いの善行ではなく、すでに与えられた恵みに感謝を表すためのしるしだと考えられています。神はどこまでも私たちを恵みと喜びの世界に招いておられます。その招かれた世界に私たちがほんとうに生かされていくのかどうかは、私たち自身のその招きへの応答にかかっているのです。

そうはいってもわたしたちはその招きになかなか応えられないのです。もっともっと神様からの恵みを頂きたい、救いの確信がほしい。それを得るためには私は善い行いを積み重ねていくことも大切なこ

とですが、それは時に相手を批判してしまいがちです。自分はこんなに頑張っているのに誰も動こうとしないという不満につながりがちです。

　そうではなくて私たちが日々出逢う出来事の中一つ一つの中に小さなイエス様を見出していくこと、小さなめぐみ、小さな喜びに感謝し、その時その時を大切にしていくことこそが天の国の宴に招かれている私たちのふさわしい応答の仕方ではないかと思います。